

◇ぼくのわるだくみ◇

橘高 榮一

昨日 ママは おともだちに コーヒーを出して  
楽しそうにおしゃべりしていた

×こどもはコーヒーは駄目

×アイスクャンデーも駄目

―でも 角砂糖は禁止されていない

お留守番で大人の気分のはくは「おさとうおいくつ？」とママの真似をして  
そのあと 全部ウー！」と叫んだ 遠くて犬が吠えた

ママは明治最後の生まれで 岡山天文博物館で有名な 今の浅口市で女学校を  
終えると京都平安女学院という 全寮制のミッションスクールで学んだ

へエステル」という洗礼名があり戦時中は悩むことになるのだが―

ママの口癖は 女性は手に技術をもって生きるべきーだった

英語、家政全般（栄養や調理、保健衛生）を学び 特に 和裁はデパートか  
ら注文が舞い込んでいた

ママのもう一つの口癖は 「それは体が要求しているのよ」だ

だから ぼくの体は今 角砂糖を「要求している」んだ

ぼくは遠慮せずに 角砂糖を一つ口に入れ

明日と次の日 体が要求しても困らないように  
もう二個取っておくことにした

他の人に見つからない場所はすぐ見つかった

氷の冷蔵庫の 奥のお皿の 真っ赤な大きなトマト

その一つに 指をつっこむと すぐ穴が開いて ぼくは一個押し込んだ  
簡単に入ったので もう一個押し込んだ

―黒手組だア ここは地獄の一丁目 角砂糖と どりこのを渡せ！

ワツハツハ 悪党め！ くらえ 殺人こうせんだ！

日本とアメリカの偉い博士が発明した 体に良い飲み物を守ったぼくは  
明日も 次も その次の日も 食べれるように 角砂糖を もう一個

真っ赤に熟した大きなトマトに隠した 角砂糖は うれしそうに

滑り込んだ

(JUL. 22 '23)